

自己意識とキャリア成熟の関連性

— 専門学校における教育相談のあり方の検討 —

久保田智子

(出雲コアカレッジこども福祉科)

問題と目的

現代社会において早期離職や安定的な雇用でない就職、ひきこもり等、社会生活への移行において課題の生じる若者の増加が問題となっている。また、2000年以降の高等教育における教育相談に関する研究の中で、「悩めない」学生について問題となっており、その要因として「主体のなさ」が指摘されている(高石, 2009)。そして、鍋田(2007)は現代の若者に共通してその傾向があると言及している。このような「主体」の育ちの未熟さと、現代の若者の社会生活への移行における問題には繋がりががあると推察できる。

専門学校は、職業に直結する専門的な知識や技術を習得する教育機関として発展してきた。しかし、現状を踏まえると、社会生活へ移行する力を育むためには教育相談的視点からの支援も必要であると考えられる。

そこで本研究では、専門学校生のキャリア成熟と自己意識の発達に関連性を明らかにし、教育相談のあり方について考察する。

方法

対象者: A 専門学校の学生 72 名 (内有効回答 68 名)

調査時期: 2019 年 9 月

調査内容: キャリア成熟の尺度として、キャリアレディネス尺度短縮版(坂柳, 2019) 使用し、また、自己意識に関する尺度として、①多次元自我同一性尺度(谷, 2001) ②一般性セルフ・エフィカシー尺度(坂野・東條, 1986) ③自尊感情尺度日本語版(桜井, 2001) を使用し、質問紙を作成した。

結果と考察

(1) キャリア成熟と自己意識の関連

キャリアレディネス尺度短縮版と自己意識に関する尺度の相関係数を表 1 に示す。合計尺度に関しては全てにおいて正の有意な相関が認められた。つまり、自我の統一が進み、自己の行動遂行可能感や自尊感情が高い学生はこれからの職業生活に

関心が高く、積極的に行動しているといえよう。

キャリアレディネス尺度と自我同一性の下位尺度の相関については、〈対自的同一性〉、〈心理社会的同一性〉において正の有意な相関が認められた。一方、〈自己斉一性・連続性〉、〈対他的同一性〉においては明確な相関は認められなかった。このことから、自分の目指すものや望むものが明確に意識され、現実の社会と自分自身を適応的に結び付けられている学生ほどキャリア成熟が進んでいると考えられる。

(2) 専門学校における教育相談のあり方

板野ら(1986)がうつ患者等で構成した病理群のセルフ・エフィカシー尺度を調査したところ、平均値は 4.00 であった。それに対して、本研究では平均値が 6.22 であり、4.00 以下の学生が 36.8% であった。高等教育の教育相談は、心の問題が症状に現れた学生に対して心理相談室等で個別に行っている場合が多い。しかし、このような状況を考慮すると、全ての学生に対して心の成長を支援するあり方が必要であると考えられる。

また、専門学校は就職に直結する資格取得や技術取得に走ってきた状況がある(関口, 1995)。そのため、教員は特定の職業分野に関する専門家で構成され、教育相談的視点が浸透していないことが多い。しかし、自己の発達の未熟さが多くの学生に見られることを考慮すると、日々の関わりの中で教育相談的視点が必要であると考えられる。

加えて、学生にとっては、知識や技術の習得のために受け身の教育になりがちである。しかし、高石(2009)は五感の体験を通したグループプログラムや授業が「悩めない」学生に一定の効果があると述べている。自分で考え、実際に体験しながら物事をやり遂げる経験の積み重ねが、行動遂行可能感の高まりや自己を見つめ、認める心に繋がるのではないか。自己意識の発達を促す教育カリキュラムの検討も課題となると考えられる。

表1 キャリアレディネス尺度と自己意識に関する尺度の相関

	自我同一性				セルフ・エフィカシー			自尊感情		
	合計	自己斉一性・連続性	対自的同一性	対他的同一性	心理社会的同一性	合計	行動の積極性	失敗に対する不安	能力の社会的位置付け	
キャリアレディネス	.480***	.262*	.487***	.285*	.518***	.481***	.415***	.223	.499***	.513***

$p < .05^*$ $p < .01^{**}$ $p < .001^{***}$